

## 看護という専門性 生かす場は国内だけではない

10月17日、帝京平成大学2年生の必修科目が始まった。「市の地区別平均年齢に注目してみてください。老年人口が多いことは、何を意味するのでしょうか。今後高齢化が進むと、社会ではどのような整備が必要になりますか」。先生の問い掛けをヒントに課題に取り組むのは、地域医療学部看護学科の学生、つまり看護師の卵たちだ。

4年前に四年制大学となり、地域医療学部を設置した帝京平成大学は、まだ短期大学だった2012年当時からは看護学科の2年生の必修科目として「人間と社会と看護」という授業を展開している。文部科学省による看護教育のカリキュラム再編を踏まえ、より広い視点で看護を学ぶために開講した科目だ。

この日は、大学のある千葉県市原市を題材として、地域の高齢者人口や介護の課題について授業が行われた。身近な市から、この後、日本全体、国際社会へと徐々に視野を広げていく。

「私は看護師出身ですが、地域や国際社会の問題にも関心を持っています。より広い視野で学生に看護を勉強してもらいたいと思い、この科目を作りました」。そう話すのは、「人間と社会と看護」の授業を担当する看護学科准教授の齋藤みどりさんだ。

地域との連携を大切にする同学部では、市役所保健センターや千葉県看護協会と連携し、授業の一環として地域の祭りに参加。来場者の肺機能チェックをして自己管理を啓発したり、病院での受診を促したりする取り組みも行っている。



授業の課題に取り組む学生にアドバイスをする齋藤さん。「さまざまな実務家の力を借りて、少しでも学生の胸に残る授業を展開したいです」と話す



大学の地元に焦点を当て、福祉の現状や課題を整理していく。看護科では、3年後の後期から病院での長期実習が始まる

JICA筑波で研修員と交流する学生たち。慣れない英語に苦戦しながらも、研修員の国について質問するなど、楽しいひとときを過ごした(2013年当時)



世界とつながる  
教室

## 活躍の場は世界。看護師の卵に伝える思い

大学4年間をかけて、膨大な専門知識を吸収し、実習をこなす看護師の卵たち。

地域や世界に貢献できる広い視野を持った看護師を育てたい――。

帝京平成大学の先生が、自身の経験を生かしながら、看護教育と学生の可能性を広げている。

**JICA 構成メンバー**

- 団長・副団長
- 医師・看護師・薬剤師
- 医療調整員・業務調整員

**活動内容**

- 被災者の診療
- 現地医療機関に対する助言

**出発: 48時間以内(派遣決定後)**

**派遣期間: 約2週間**

**派遣実績: 57回**

**5. 医療チームに登録するには?**

1. 登録の流れ

JDR医療チームへの登録には「仮登録」と「本登録」の2種類があり、JDR医療チームとして派遣されるためには「本登録」されていることが必須条件となります。登録及び研修の流れは次の図のようになっています。

国際緊急援助隊の医療チームについて紹介したJICAの資料。登録には、職種に関する5年以上の実務経験など、いくつかの条件が定められている

「人間と社会と看護」の授業では、日本ユニセフ協会や社会福祉のNPOなど、毎回、看護に関わるさまざまな分野の実務家を講師に迎えている。その一つとして、JICAと協力して実施しているのが、「開発途上国の実情と支援」の講義だ。

JICAによる国際緊急援助隊の紹介について齋藤さんは、「写真を交えた活動紹介に加え、参加するための登

録方法や派遣時はどのように召集がかかるのかなどの具体的な説明がありません。講義を通じて理解を深めた学生たちからは、「いつか参加したい」という声も出てきています」と授業の効果を話す。この他にも、JICA全体の事業紹介や、青年海外協力隊に看護師として参加した元隊員の体験談もあり、受講した学生たちにとって、将来、活躍できる選択肢の幅を広げる機会となっている。

過去には、JICA筑波を訪問して

講義を受けていた時期もあるという。「そのときは、開発途上国から来ていた研修員たちとの交流もあり、学生たちは大きな刺激を受けたようでした。まずは、国際緊急援助隊や青年海外協力隊を含め、世界にも看護師としてのさまざまな活躍の機会があることを知ることが第一歩です。そうした新しい視野を提供することが私の役割だと思っています」と齋藤さんは語る。

この日、授業を受講していた清宮百

た強い意志が隠されていた。

「看護師として小児病棟に勤務していたころ、入院している子どもたちが、勉強したくても、学校と違って院内では継続的に学べる環境がないため、勉強が分からなくなって嫌になってしまっ様子を見てきました。病院でも子どもが教育に触れられるようにしたいと思い、いつか教職の資格を取ろうと心に決めました」

看護師として15年間働き、自身の子育ても一段落したところで、齋藤さんは再び大学に入学。社会学を学びながら教職の資格を取った。「看護師を辞めることに迷いはありませんでした。長年、病院に勤務し、看護師長などを務めるようになると、現場から遠ざかり、仕事を教えてくれる人もいなくなるものです。より広い視野を身に付けなければいけないと考えたとき、私の場合はその手段が社会学でした」。齋藤さんは大学院に進み、社会問題への理解を一層深めた。

「医療分野では、ハンセン病や肝炎訴訟など、苦しみの声が届かずに社会から置き去りにされてきた人たちがいます。看護師は患者の代弁者でもあると思うんです。目の前にいる人のため、地域社会や世界のために、自分に何ができるのかを考えることができる人を育てたいと思います」

「未来への種まき  
広い視野と患者に寄り添う心」

もともと地域や国際社会の問題に関心があったと話す齋藤さんだが、その言葉の裏には、看護師としての苦い経験と、それを教訓に学業を追究してき